



# 第20回 FD フォーラム 「10年後、20年後の大学教育を考える ～ AIは人の生き方を変える?!～」

中部大学 大学教育研究センター副センター長 理学療法学科 教授  
宮下浩二



8月31日、アクティブホール（不言実行館 ACTIVE PLAZA 1階）で第20回 FD フォーラムが開催された。

## 1) 10分でわかる AI 講座

平田 豊 中部大学学長補佐、工学部ロボット理工学科教授

## 2) パネルディスカッション

パネリスト：

廣瀬 克哉 法政大学副学長、学校法人法政大学常務理事

小池 利和 ブラザー工業株式会社代表取締役社長

滝 紀子 学校法人河合塾中部本部上席調査役

三浦 真琴 関西大学教育推進部教授、教育開発支援センター副センター長

コーディネーター：

稲葉 寿美 中部大学大学教育研究センター客員教授、フリーアナウンサー、株式会社 INANA エンタープライズ代表取締役

## フォーラムの趣旨

本フォーラムは以下の趣旨から始まった。「2013年、オックスフォード大学で AI などの研究を行うマイケル・A・オズボーン博士が、『人間が行う仕事の約半分が機械に奪われる』といった衝撃的な予測を発表した。……中略……。教育（現場、教職員）も例外ではなく、今後はどのように変化していくのか、その対応を含めて、まだまだその方向性が見えていない。フォーラムでは、これからの世界を担う若者のために、大学（教育現場）はどう変わっていくのか、また、変わらざるを得ないのか……略。」この趣旨に「10年後、20年後の大学教育を考える AI は人の生き方を変える?!」というテーマが設定された。AI 自体への理解がまだ不十分のなか将来の大学教育を考えるという挑戦的な企画である。

## 10分でわかる AI 講座

パネルディスカッションに先立ち、平田豊教授から「10分でわかる AI 講座」として AI そのものの基礎知識を講義し



AI の基礎知識を講義する平田豊教授

ていただいた。まだ社会的にも AI に関する正確な知識は普及されているとは言い難く、本ディスカッションでも手探りでその概要の理解を試みた。現状でもその本態を理解するのは容易ではなく、さらにこの先 AI がどのように展開されていくのか、に関するイメージを伝えていただいた。

## パネルディスカッション



廣瀬克哉氏

パネルディスカッションに移り、廣瀬克哉氏の話提供から始まった。現在までの大学は官僚制化した社会を支える

人材を多数、効率的、体系的に輩出してきた状況にあるが、現実社会で行動するためには枠に当てはまらない状況への対応力が必要となると指摘されていた。また、人の営みとして「目的合理的な活動」は AI により自動化されていくであろうとした。一方で、法政大学憲章である「自由を生き抜く実践知」が示すように、「一筋縄ではいかない現実の中で自由であり続けるための知性」「すべてが理想的ではなく、現実制約の中で実現する能力」を獲得していくことが、AI にはできない人としての能力であろうと示唆された。それは単なる方法論の獲得ではなく、「人間にとっての善、目指すべき価値を倫理的に考え抜き、その目指すべき価値を実現する方法を柔軟に探索する知性をもった人材を大学は育てるべき」と提言された。これは今までもそうであり、今後もそうである、とのことであった。



小池利和氏

小池利和氏は、グローバル企業として自社を展開する中で重要視していることが従業員とのコミュニケーションであるとした。ビジネスではコミュニケーション、「人と人のふれあい」が重要であり、それを基盤にしたネットワークを拡大する必要性を強調されていた。実際の業務でも IT 関連のアイテムの使用のみならず、Face to Face の直接的なコミュニケーションを積極的に図られている。日本を代表するグローバル企業においても最終的に求められることは人と人の交流であり、手段として AI が活用できても、人がビジネスを営むために必要な本質的方法ではないことがうかが



滝紀子氏

われた。

滝紀子氏は、AIを活用し、新しいことを創造できる人材を育成するのが大学教育の使命である、と述べら

れた。その上で、高大接続改革に関係する大学入試制度の視点から大学入試では、求める人材像を選択するためには、「思考力・判断力・表現力等を多面的に評価する大学入学選抜方法の確立」が重要であるとした。特にエリート教育においては、ハーバード大学の入試の例を示しながら、「表面的なことではなく、高校3年間で何をなしてきたか？」を多面的に判定すべきとのことであった。決して知識が不要というわけではなく、知識を深めることは重要・前提であり、知識とこれらの能力は常に車の両輪であるという認識を示された。



三浦真琴氏

三浦真琴氏は、“From teaching to learning”を切り口に、現在に至るまでの大学教育の問題点を指摘された。「教えれば学

ぶ」という前提に対する疑問を投げ、また、標準化主義・平均思考・知識信仰・正解主義に導かれた科学的管理法＝テラーリズム、教育の工場化に陥っている現在までの大学教育の在り方に危機感を感じられていた。Learningとは学習者が能動的に意味を探求し、過去現在未来をつなぐ知識を構築し、意味を探求する営みであるため、学生が学ぶ(Learning)ために教員は教える(to teach)からto coach(引き出す)かつto assist(支える)が求められるという。教員は「教えること」と信じ込まされてきたが、学生にとって重要なことは概念学習(知の転移)より体験学習(知の構築)であると示された。そしてSense of wonderとSerendipityを大事にすることが要点であり、このことはデジタルにはできないであろうと話

された。

その後、稲葉寿美客員教授のコーディネートによりパネリスト4人によるディスカッションが行われ



稲葉寿美客員教授

た。フロアからの質問に応答する中で提言された内容の主立ったことは、以下の通りである。

廣瀬氏からは「日常でないフィールドに放ち、体験させ、経験値を高める。ただし、事前準備・事前学習をしっかりして、持ち帰って自分で考える材料を体験の中から見つける」ことの重要性が提言された。

小池氏は「コミュニケーションで育つわけではなく、ネットワークが広がったりして、いろいろな経験ができ、自分がやるべきことがみえてきて、他者にも関心が出てくる。楽しく元気に働ける。大学は人のネットワークを構築できる」と社会に必要な能力を繰り返された。

滝氏は「AIは高度なツール。活用できる人、できない人の格差が今後生じてくる。AIをどのように使うかを考えると大学教育は変わってくる」とした上で「AIの発展により時間ができる。新しい仕事ができるはず。そこにどうやって次世代をつなげるかが大学の仕事」と話された。

三浦氏は、学習意欲はどうしたら身に付けられるか?という問いに「教員も子どものころの好奇心を思い出してほしい。子どもからの質問に対して『へー!』と思える答えを伝えることで、次の好奇心、次の問いが生まれる体験となる。どのようなことでも正解が変わることがあること、一つの最適解が重要ではないことを体験させることが重要」と言われた。

## フォーラムを終えて

AIが及ぼす影響については、まだ社会全体で限定的にしか実感できていないのが実情であろう。そのため、大学教育に及ぼす影響の具体性は想像さえ難しい。しかし、現在予測できるAIの能力を考えることで、むしろ人間の営みに必要な能力およびその能力を育むために大学教育に求められることに考えが及んできたように感じた。

自身の分野のことで恐縮であるが、理学療法士の業務は、患者個々の問題点を評価し、対応策を講じている。臨床の実際では、平均的な治療法、教科書のみ知識ではとても治せないことが多い。そこには最適解を常に求めながら、変化する個々の症状に対応することが求められている。これは、社会で働く場合においても普遍的なことと思われる。そのためには実践と経験が必要であり、人としての在り方と熟練された技術が求められていく。このことは、大学教員による学生教育の営みとなら変わらないのでは?と思う。ただし、その営みには、人の目に見えるデータ、人が認知できるデータ以外の要素からも情報を無意識に得て学習しながら対応力を上げていく過程があるものと想像する。

AIと教育について考えていくことは、まだまだ未知な要素が多く感じられたものの学生とともに教職員が成長するためには、今回のテーマに対する議論を今後も弛まず続けていかなければならないと考える。



パネルディスカッション